

## アメリカの貧困(二)

—アメリカにおける貧困戦争と社会事業—

今岡健一郎

アメリカにおける貧困戦争と社会事業

一、はじめに

二、社会事業の幻想

三、現代における貧困の特徴

(一) 別世界の生活

(二) 季節労務者のキャンプ

(三) 残された課題

四、誤あやまった貧困観の追放

(一) 貧乏人は現状維持が好きである

(二) 貧乏人は物がよく云えない

(三) 貧乏人はすねており無感動で近寄り難い

(四) 貧乏人は代弁者を必要としている

(五) その他の謬見

五、貧困追放の論理

六、結 び

アメリカにおける貧困戦争と社会事業

一、はじめに

一九六四年一月、ジョンソン大統領が貧困に対する「無条件の戦争」を宣言して以来五年の歳月が過ぎようとしている。此の五年間に、北爆の激化を主軸としたヴェトナム戦線の拡大とは逆に、貧困戦争の戦線は縮少されるかの如き様相を呈し、その戦費も国会で削減の憂き目を見かけたり、或いは黒人暴動の瀕発の後には、貧困戦争の兵士たちの中に、黒人暴動の火つけ役がいるのではないかと陰口をささやかれさせられたのである。<sup>(2)</sup>

貧困戦争の統合参謀本部とでも云うべき「経済機会庁」Office of Economic Opportunity<sup>(3)</sup> は、初代長官サージエント・シユライバー(Sargent Shriver) (故ケネディ大統領の就任と同時に創設された平和部隊 Peace Corps の初代隊長) の精力的な努力にも拘らず、最近折角関係各省の総合調整機関として発足した創設趣旨を一部修正し、同庁所管事項の一部を既存の官僚機構に移管したりして、その活動範囲をやや縮少している様である。こうした動きの中でシユライバー長官は、本年(一九六八年)三月遂に駐仏大使として転出してしまった。

しかしながら同長官の転出は右参謀本部の閉鎖を意味するものではなく、また貧困戦争は、その予算が年々やや減少気味であるとしても引き続き着実に戦われていることは更めて云うまでもない。ただその戦果が、相いついで起った暗殺事件、ヴェトナム問題或いは大統領選挙問題等々のビッグニュースのかげにかくれて華々しく報導されていないか或は実際に余り華々しい戦果が現実にはあげられていないかのいづれかである。

こうしたアメリカの貧困戦争の一連の動きはアメリカにおける貧困問題が今日依然として複雑で根深い問題であること、そしてゆたかなアメリカ社会において「見えなかった」のが多くの人々に「見えるよう」になった貧困問題に対して多方面に亘る極めて積極的な攻撃が着実につづ

けられていることを意味するものであろう。

わたくしは、日本における低所得対策としては民生委員に大きく依存する世帯更生資金制度以外にはほとんど見るべきものがない現状に鑑み、アメリカにおける上述のような極めて多面的な貧困攻撃作戦に何らかのヒントを見出し得るのではなからうかという意味において、また偉大な資本主義体制の典型であり共産主義政党が公認されていないアメリカにおける貧困対策の効果と限界をつきとめることは無意味ではないであらうという意味において、アメリカの貧困戦争に興味を持つものであるが、その戦斗の詳細な検討は別の機会にゆづることにして本稿ではメリーランド大学社会事業学部長サース教授の論文を手がかりとしてアメリカの貧困の一面について簡単に述べることとする。

#### (1) War on Poverty

田中寿「アメリカの貧困戦争」国立国会図書館調査立法考査局レファレンス第一九〇号(昭和四十一年十一月)、拙稿「アメリカの貧困」淑徳大学紀要第二号一九六八年一月、「The Americana Annual 1968, "Anti-Poverty Program", p. 58~59, Americana Corporation, 1968 等参照。

(2) 一九六六年の選挙で勢力を増した共和党は政府の貧困追放政策に対する反対を強め、また今年夏、都市に瀕発した暴動のため、大衆の一部には貧困戦争に敬意を抱くものさえあらわれた。こうした中で一九六八年年度の貧困戦争予算はその成立が一時あやぶまれたが、結局前年度より一億ドル増の十七億七千三百万ドルに落ついた。(The Americana Annual

1968, p. 58)

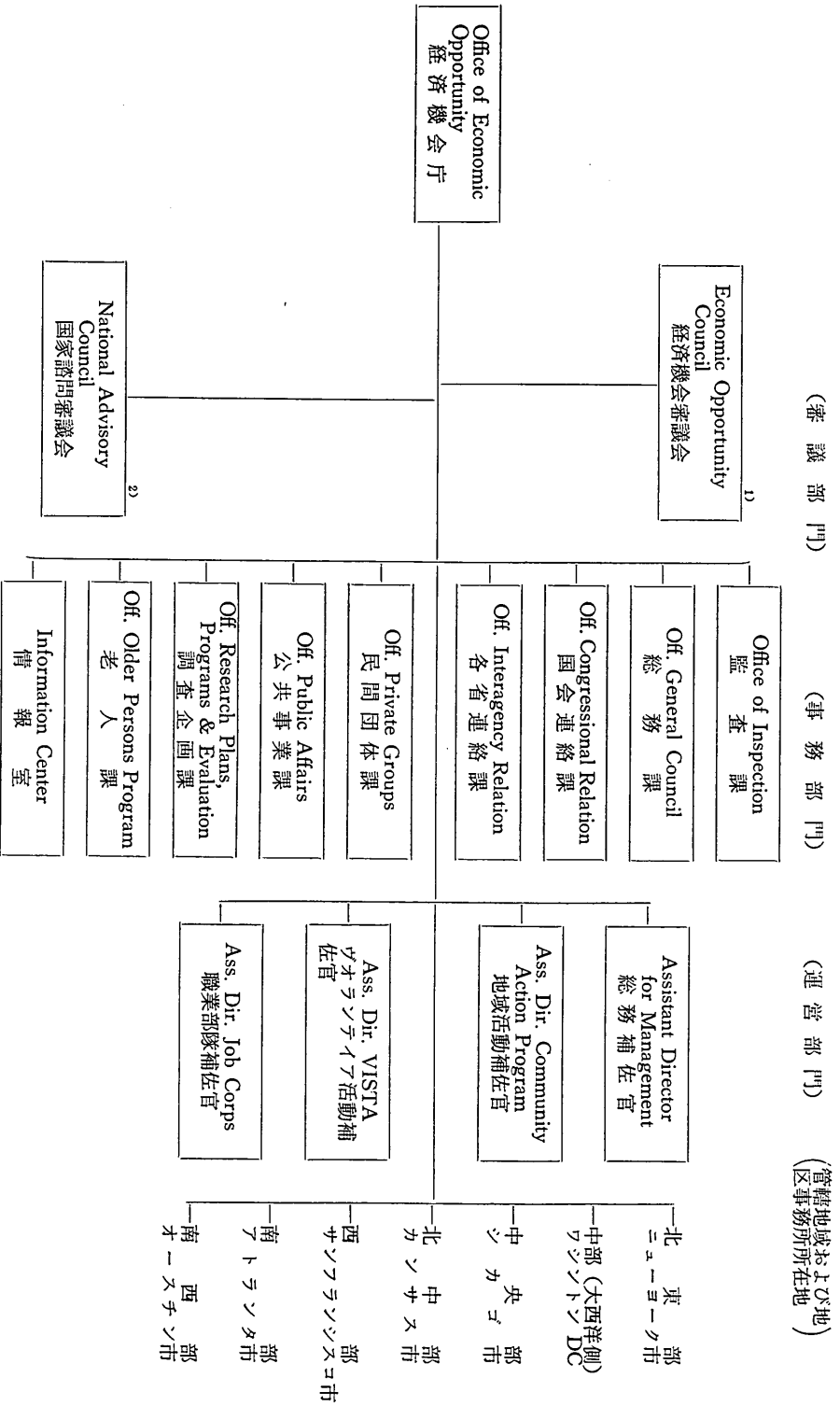
(3) その機構の概略は次の通りである。

(4) American Public Welfare Association "Public Welfare" July 1967に掲載された本論文は、ダニエル・サース(Daniel Thursty)教授が一九六六年ワイオミング州社会福祉大会およびスコットランド・ハリファックスで開かれた社会福祉大会で行なった講演に手を加えたものである。同教授は「経済機会庁」職員としての経験を生かして、貧困が人間の精神にどのような影響を与えるかを鋭くついている。彼は貧乏追放戦争の勝利こそ世界平和実現のために不可欠な条件であることをはっきり指摘している。

## 二、社会事業の幻想

サース教授は上記論文の冒頭において次のように云う。「私は貧困戦争の戦列に参加していること、とりわけ『平和部隊』国内版とも云うべき『アメリカ奉仕隊』(Volunteer in Service to America=VISTA) 隊員であることに誇りをもっている。そしてサージエント・シュライバー(Sargent Shriver)を長官とする経済機会庁(Office of Economic Opportunity)の職員の一人として私は、本戦争の戦斗開始に際して専門社会事業家で積極的に参加したものはほとんどいなかったが、われわれの専門職業すなわち社会事業の理念は正に、貧困戦争の統合参謀本部である「経済機会庁」の根本精神に他ならないと信じて疑わない。

経済機会庁機構組織図



(審議部門)

(事務部門)

(運営部門)

(管轄地域および地区事務所所在地)

- 1) 各省長官 12 名より成る。
- 2) 副大統領が名誉会長、会長は本庁長官、委員 14 名は一般国民の中から大統領が任命する。
- 3) 1967 年 4 月より新設 資料、前掲、田中寿「アメリカの貧困戦争」および The Americana Annual 1968.

人々の援助をするという根本的な仕事を達成するためには専門家気質以上の何ものかが必要であると私は思うが、それと同時に、当参謀本部としては戦斗開始に当って、凡ての社会事業家に、人々のニードに最も効果的に対応する作戦を問うべきであると思う。ここにおいて私は、社会事業家にとって最も意義ある戦争はこの貧困戦争以外にないと確信するものである」と。

サース教授のこの確信に対して、「何故社会事業家は貧困問題に関心を持たなければならぬのか」「社会事業はもともと貧乏追放戦争の第一線にいたのではないか」という反問がある。

たしかに社会事業家の中には貧民に対するサービスをしる仕事として来たものもあるが、多くの社会事業家は、いろいろの理由から、中産階級の人々を主な対象とし、より専門的な清潔な環境条件の下で仕事ができるような施設あるいは機関で働いているという傾向がある。リチャード・クロワード (Richard Cloward) は「社会階級と民間社会福祉施設」という論文<sup>(1)</sup>の中で「社会事業の幻想」(illusion of service) ということばで、社会事業が貧困問題以外の問題に熱中しているのは誤りではないかと警告しているが、こうした傾向は、生活保護の領域において主役が民間より公の機関に代った一九三〇年代から始まっている。

社会事業家が、熟慮した上で意識的に上記のような活動領域を選択したには多くの理由がある。ワーカーは、地位とか、専門的な勉強のできるチャンスとか、コミュニケーションの問題等に関心があるというのもその理由の一部である。いづれにしても、社会事業施設としては「カッコイ」(respectable) 環境で、「カッコイ」人々を扱っている方が「カッコヨ」だったのである。このようにして合衆国では専門社会事業家は貧乏追放戦争の戦場から離脱してしまい、しかも、彼らの中には、長年にわたるとても見込のなさそうな、精神医学への片想いに浮身をやつしているワーカーが多数いるのである。

公的機関はその後も引きつづき貧困者にサービスしているが、それは一般大衆の要望に依っているのだと云えよう。今日、貧困戦争の第一線にいる新兵の中には、今迄の社会事業および社会事業施設は貧困問題の攻撃に失敗したと公言しているものがある。彼らは公的社会事業は失敗だと声を大にして叫んでいる。なるほど失敗したかもしれないが、その敗因は、地域社会全体が成功させようとしなかったところにある。

公的社会事業関係者は、十分な兵力も武器ももたず、しかも攻撃目標を具体的に明かにしないで戦斗を進め、一般大衆の利益に奉仕しつづけたという点で最大の非難を浴びている。というのは、一般大衆は貧困者がアメリカにおいて「見えなくなる」ことを欲していたので、貧困問題

はすべて公的機関に委せて見て見ないふりをしていたからである。そして事実彼ら貧困者は未だかつて想像されたこともない程に「見えなく」なったのである。たしかに貧困者は社会事業家フィランソロピストの目に「見えなく」なっただけでなく、彼らを援助するために設置された公私の社会事業施設にも「見えなく」なってしまった。まさに悪循環である。近寄り難い人々や家族が、之また近寄り難い施設やワーカーの援助を受けなければならぬことになった。埋め難い溝はますますその巾を拡げたのである。

社会事業の関心が貧困問題から離れいくつかの幻想を追っている間に、一九五〇年代の不安、反動、無感動そして物質主義の十年が過ぎていった。この十年間には、青年への希望は失われた。大学生は早熟にも安楽、生活の安定そして世間と没交渉の生活にしか関心を示さないかのように見えた。一九六〇年代に入るや、ニュー・フロンティアの時代が突如開かれた。それはアメリカ人を、全国津々浦々に至るまで無感動状態から目ざませた。新しい、胸をおどらせるような数々の挑戦が、若い、力動的な大統領の綱領の中にとりあげられた。その一として『平和部隊』(Peace Corps)が創設され、アメリカ人の利他心という心の炎は再び燃え上らされたのである。こうした空気の中でマイケル・ハリントンという青年評論家が「もう一つのアメリカ——アメリカにおける貧困問題」という著書(2)の中で、貧困問題こそアメリカの直面している最も重大な社会問題であると主張した。貧困戦争の開戦はこうして着々と準備されていったのである。(3)

- (1) Richard Cloward, "Social Class and Private Social Agencies" Education for Social Work, 1963. (New York: Council on Social Work Education, 1964.) pp. 123~147.
- (2) Michael Harrington, "The Other America: Poverty in the United States. The Macmillan Co. 1962.
- (3) 内田・青山訳「もう一つのアメリカ」日本評論社一九六五年  
 拙稿「アメリカの貧困」淑徳大学紀要第二号二頁。

### 三、現代における貧困の特徴

貧困と社会的不平等を放置すべきでないことを同胞に訴えたのは、上記ハリントンが最初ではない。

「アメリカの大都市のうちで、社会組織が崩壊していないところは数える程しかない。極貧状態にある人々の数は多く、その大部分は辛うじて飢をしのぐのが精一杯である。彼らはその日暮しの生活に追われ、大勢の人々が隣り合せに暮しながら、お互に顔も名前も知らず、つきあひもしない。彼らの間には、住んでいる土地の伝統もなければ公共心もなく、およそ組織らしいものは何一つないのである。この状態を救済

すべき対策は何一つなされてない。救済対策を講じようとするれば講じられるかもしれない人々——彼らは社会的なつながりはあるし、教育もあるし、大きな邸宅に住んでおり、そして他人を歓待する伝統と習慣は持っているのだが——は、皆、同じ都市の中でも別のところに住んでいるのである<sup>(1)</sup>

この様な都市における貧困問題を正しく診断した人は、ジェーン・アダムス女史 (Jane Adams)<sup>(2)</sup> であった。しかも彼女は之を七十七年前に書いたのである。

貧困の歴史は古いが、アダムスの当時と今とでは、同じ貧困問題と云っても大きな相違がいくつかあることは当然である。その相違点を次にとりあげてみよう。

先づ第一に、今日の北アメリカ大陸においては、凡ての経済的貧困を絶滅させるだけの能力があるということである。第二には、今日吾々は世界全体の貧困問題という大問題をかかえているということ、そして、米国内の貧困戦争は、アフリカ大陸やアジア大陸におけるそれと較べると極めて小規模のものに過ぎないということである。ここで一寸、シエークスピアの「ヘンリン四世」の中の「私は主ヨブと同じように貧乏ではありませんが、それほど苦ではありません」という予言的な科白を想い起してみたい。

第三には、ジェーン・アダムス女史の時代にはなかった、貧困問題そのものおよびいくつかの貧困原因に対処すべき道具をもっていることをあげることができよう。すなわち現在では、政府の企画、経済政策、実験済みのコミュニティ・オーガニゼーションの技術、産児制限薬、その他いづれ世論の支持が得られると思われる貧困問題解決の手段があるのである。ここで特に注意を払うべきことは、吾々の意のままになる貧困問題解決の道具であると同時に、「豊かな社会」の真只中に住んでいる貧乏人にとってはフラストレーションの原因ともなるマス・コミュニケーション網が社会の隅々にまではりめぐらされているということである。

## (一) 別世界の生活

ここであえて小見出しをつけて、この最後に指摘したマス・コミの問題についてもう少し詳しく述べよう。之は貧困者にとっては致命的な問題である。彼らの中には一般社会から全く孤立して生活しているものもある。例えば山間僻地の部落やモロッコの都市に生まれた貧困者は、アメリカの一般市民の生活などほとんど知らずに生活している。数百年の間貧困者は自分の運命を、他人のそれと比較することなく甘受して来た。

彼らは別世界の生活のあることを知らなかったのである。ところが今日では、貧困の底に転落し、あばら屋やスラムに、世間の人々からは殆んど忘れられたままで生活している人々でも、金持の豊かな生活をよく知っている場合が多い。彼らはその別世界の生活を、毎日毎日、テレビジョンの大衆消費時代のコマーションシャルやメロドラマや或は西部劇の中で見ているのである。

### (二) 季節労働者のキャンプ

マスコミの道具が、如何に貧しい人々の気持をかき乱しているかを、サース教授は、最近訪問したフロリダの季節労働者のキャンプ印象記という形で次の様に述べている。

「それは最も典型的な季節労働者の宿舎であった。道は悪く、一部屋の小屋に家族全員が起居している。便所は屋外にしかない。水道栓は十軒に一つの割合にしかない。その住人たちの唯一の話し合いの場所はバーだ。しかしテレビのアンテナだけは何十本とその小屋の屋根の上にそびえ立っていた。私が訪ねた夜は特に寒く、彼らは震えながら、『豊かな』生活をえがいたテレビジョンやコマーションシャル——葉巻、ジェット機、電気冷蔵庫、七面鳥のご馳走、そしてキャデラックのコマーションシャルを見ていた。貧民たちは目覚めてから夜寝るまで、彼らの手にはとどかない一般アメリカ人の裕福な生活をえがいたコマーションシャルの画像を、これでもか、これでもかと云ぬばかりに見せつけられているのである。彼らの気持の中に、にがにがしい思いや、自暴自棄<sup>ヤケツミ</sup>の心が起るのは当り前である。ワッツ<sup>(3)</sup>の暴動の原因はいろいろあるが、その一つは、テレビジョンでかくも屢々見せつけられる物質的幸福を自分たちにも分けてもらいたいという欲求だと言っても間違いはないだろう。」

### (三) 残された課題

貧困戦争は五年目を迎えたところである。之は一九六〇年代の危機に対決する政府の重要施策の一つに過ぎない。アメリカ国民はまだ国の行く社会政策に全面的信頼は与えていない。国民大衆の間には、レッセ・フェールの昔の夢が、そして夜警国家という古いイメージがまだ完全にはぬぐい去られていない。こうした社会的風土のなかで残された課題は少くない。老人に対する包括的な健康保険制度が<sup>(4)</sup>ようやく陽の目を見るようになったのはケネディを引きついでジョンソン政権の出現後である。老人のみでなく全国民を対象とする健康保険制度、退職老人に対する適切な年金制度そして多子家庭に対する、ミーンズ・テストという人権を無視するような手続を必要としない家族手当(児童手当)制度……等々は今後に残された課題である。



(1) Jane Adams, "Twenty Years at Hull House", 5th Edition New York: The New American Library, 1961, p. 255.

(2) ジェーン・アダムス (Jane Adams) はアメリカの最も古いセツルメント「ハル・ハウス」(Hull House) — 一八八九年創立 — の創立者であり初代館長であることは有名であるが、「一八六〇年イリノイ州のある町で製粉業者の娘として生れた。」(一番ケ瀬康子、アメリカ社会福祉発達史、光生館、昭三九、一〇四頁) 七才の頃既に貧民問題に関心をもち、父親に「大きくなったら貧乏な人たちの住んでいるところに大きな家を建てて近所の貧しい人たちと仲良しになりたい。」(「Hull House, The Hull-House Association 1949, p. 3」と云ったといわれている。一八八三年に欧州旅行の途中、創立後四年目の「トインビー・ホール」(Toynbee Hall)を見学、帰国後「ハル・ハウス」創立の決意を固めた。彼女は生涯をその経営に捧げたが、その間、貧困調査、労働組合運動の援助、アメリカ児童局の設置促進等、巾広い社会運動の指導者として大いに活躍した。

(3) ワッツ (Watts) はロサンゼルスの一地区。一九六五年八月黒人の暴動が数日間にわたり起り多大の損害が生じた。翌一九六六年にも数回暴動が起り、暴動の街として有名になった。同地区の住民四十万人のうち二十四ないし三十パーセントが失業していると云われる。

(4) 老令者医療保護法 Medicare と略称される。一九六五年の国会において社会保障法の一部改正という形で制定され、一九六六年七月一日から施行された。保護の対象は六十五才以上の老人(約一千九百万人)強制加入の社会保険方式による基本治療と任意制の補足保険とにより医療保護を行う。医療費負担がどの程度軽減されるかを一、二の具体例によって示そう。

十日間入院して手術を受けたA氏の場合

費目	所要経費	国家負担分	自己負担分
入院料	四百ドル	三百六十ドル	四十ドル
手術料	四百ドル	*二百八十ドル	百二十ドル

アメリカの貧困(一)

計 八百ドル 六百四十ドル 百六十ドル  
 癌で三ヶ月入院後療養所で六ヶ月療養、その後自宅で医師の住診を受けていたが死亡したB氏の場合

入院料	三千六百ドル	三千二百六十ドル	三百四十ドル
療養費	一千八百ドル	六百ドル	一千二百ドル
往診料	一千二百ドル		一千二百ドル
計	七千五百ドル	*一千六百四十ドル	*四百六十ドル
		三千八百六十ドル	三千六百四十ドル
		*五千五百ドル	*二千ドル

\*は補足保険加入の場合

A氏の場合は八百ドル(二十八万八千円)の医療費のうち自己負担は百六十ドル(五万七千六百円)(但し、補足保険に加入しているものとして)で六百四十ドル(十万二千四百円) — 八割 — の負担軽減であり、B氏の場合は、総費用七千五百ドル(二百七十万円)のうち自己負担は三千六百四十ドル(百三十一万四千円)で、三千八百六十ドル(百三十八万九千六百円) — 約五割 — 軽減されることになる。若しB氏が任意の補足保険に加入していれば、軽減額は五千五百ドル(百九十八万円) — 約七割 — となり、自己負担額は僅か二千ドル(七十二万円)で済むことになる。

なお保険料は収入の〇・五パーセント、補足保険料は一律に月額三ドルである。

アメリカの社会保障制度には日本のような一般国民を対象とする健康保険制度を欠いていることは周知のところであるが、右の Medicare の実施により六十五才以上の老人のみを対象とする医療保護制度は制限つきではあるが実現し、アメリカの医療保険制度も一歩前進したことは事実である。

右は老人医療保険の概要であるが、わが国の医療扶助に相当する低所得階層保護については、アメリカ社会保障法の一九五〇年の改正迄は殆んど見るべきものがなく、同年の改正によりはじめて、公的扶助として老令扶助(Old Age Assistance)を受けている者に対してのみ現物給付と

しての療養給付が、次いで一九六〇年の同法改正により老令扶助を受け  
ていなくても低所得老人に対して同様の療養給付 (Medical Assistance  
for the Aged) が、そして一九六五年の同法改正により、老令扶助のみ  
ならずいづれかの公的扶助を受けている者に対して療養給付 (Medical

Assistance) が支給されることになり、老人のみでなく何らかのハンデ  
ィキャップをもつ低所得階層に対する医療扶助が陽の目を見るようにな  
ったのである。(詳細は籠山京、江口英一、田中寿共著「公的扶助制度  
比較研究」光生館一九六八年一〇月六六―六八頁参照)

#### 四、誤まった貧困観の追放

貧困をなくそうとするこの努力——貧困戦争——は思いがけない戦果——それは今まきにはつきりした形をとろうとしており、そして、合衆  
国だけでなく世界中の多くの国々においても政府の介入戦術に影響を与えるに違いない——を挙げている。

戦闘開始以来、数多くの、昔からある誤まった貧困観——謬見——が、果して正しいかどうかの試練を受けている。この挑戦は、適切な実験  
と調査、そして十分説得力のある証拠書類に基づいてなされているのである。之らの謬まった貧困観を信じない人もいるが、重要な地位にある  
人々の中で、それを真実だと思ひ込んでいるものが多数いることも事実なのである。

##### (一) 「貧乏人は現状維持が好きである」

貧困についての第一の謬見が之である。こう云う見方に吾々は屢々出会っているのであるが、之は長年月に亘って、地域社会の不精——貧困  
対策について消極的であること——と自己満足を合理化するために利用されて来ている。ある役人が最近次の様に語った言葉は印象的であっ  
た。「あなた方は之らの貧乏人たちが私生児を生んで喜んでいるのを理解しない。奴さんたちは週末に一杯ひっかけることしか考えていない」  
と。

可なり昔のテレビ番組「これが現実だ」で、故エドワード・R・マロウ (E. R. Murrow) は「恥辱の収獲」(“Harvest of Shame”)とい  
題名で季節労働者の生活をレポートしたことがあったが、マウロ氏と面接しているところが大寫しになったある百姓はたしかに、「この人々  
をあなた方の物差しで判断しようとしなさい。彼らはこの生活が好きなのです」と話していた。之らは明かに第一の謬見の普遍的である  
ことを裏書きする事実であると云えよう。

然し之迄に行なわれた各種の実態調査は右の事実を否定し、そして第一の謬見がたしかに誤謬であることを証明する。すなわち、吾々は之ま

で、都市のスラムや、アバラチャ山脈の谷間や、インディアン保有地や、季節労働者のキャンプや或いは職業部隊 (Job Corps) 訓練センターに住んでいる貧しい人々との数え切れない程の面接その他の接触の機会をもって来たが、吾々は未だかつて、悲惨な現状に満足し、いわゆる幸福な生活を拒否する人には一度も出会っていないし、「電気冷蔵庫やステンレスの流しなんかほしくないと云う人にも出会っていない。そしてまた、私生児を生んで喜んでいる母親も実際には一人も見ただことではないのである。

首府ワシントンにおける低所得世帯の育児実態調査結果も、第一の謬見、貧乏人は現状維持が好きだということを否定する。

ハイラン・ルイス (Hyman Lewis) を団長とする特別調査団が四年間に亘って、ワシントンにおいて右の調査を行った。本調査の調査員は全員貧民居住地区に泊り込んで調査を行ったのである。調査をはじめの際に地元の人々は調査員にこう話しかけた。「さあ、あなた方のまわりには大勢の人がうようよしていて、あなたにいろいろ話しかけるから、あなた方は此処でどんなことが起っているか、いろんなことがわかるだろう。だけど、あなた方は家の外での出来事しかわからない。あなた方は家の内側の出来事はわからないけれど、私はわかる——私は家の中に behind the door 住んでいるのだから」と。ワシントン社会事業家、人類学者、社会学者そして新聞記者の混成チームであるこの調査団は、家の内側<sup>(2)</sup>にまで入り込み、突っ込んだ調査を行なった五十五世帯について、「彼らは全く中産階級と変らない反応を示すことを突きとめたのである。すなわち、そこに住んでいる人々は、私生児を生むことは恥しいことだと思っっているし、夫に遺棄されたことには憤慨しているし、先のことはどうでもいいとは思っていないし、そして生活を少しでもよくしたいと思っっている」<sup>(3)</sup>ことがはっきりしたのである。彼らは、第一の謬見のように、現状維持が決して好きではないのである。その事実を証明するように、ここの住民のことは二、三次に紹介しよう。

その一

「家の中には食べる物が何もなかったの、わたしは子供たちをお腹をへらしたまま学校に行かせ、家に帰って来るときもペコペコでいさせたくなかった。できることなら、子供たちが「ごはん！ ごはん！」と云って泣きわめくときだけでも、家の中でわたしと一緒にいて、みんなをわたしのまわりに坐らせて両手でだいてやりたかったと思っった。

あの子は、学校から上着を半分ちぎられて帰って来た。昔ならばわたしはあの子をどやしつけて仇をうって来させたかもしれない。今ではわたしはけんかをしたくないように叱ってやる。街に出ると大きな子供たちが、けんかをしたくないと云って小さい子供たちをなぐる。だけど学校の

先生たちはこんなことは知らない様だ。」

その二

「私はいつも自分にできないなんてことはないのだと云いきかせています。私はいつも、今に何とかしようと思いきかせています。あんなにあっさりあきらめてしまわなければ、もっと楽な生活ができる人が大勢いるだらうと私は思います。人間と云うものは、ある目標を定めて、そこに到達するよう努力し、またそこから転落しないように努力すべきだと思います。私は現在そうしようと努力しているし、今後もずっと努力をつづけて行くつもりです。」

その三

「女にとって男ほど大事なものが他にあるもんか。お金も大切にはちがいない。男の中には女に金を呉れるものもいるけれど、金をもらうだけではつまらない。わたしは学はないけれど、母親としてのちえは沢山あるし、女にとって男ほど大事なものはないことを知っている。」<sup>(4)</sup>

ワシントンから数千マイル離れたプエルトリコのある淫売婦の娘、フェリシタの告白も、「貧乏人は現状維持が好きだ」という第一の謬見を否定する。

オスカー・ルイス (Oscar Lewis)<sup>(5)</sup> はプエルトリコで、フェリシタという、二十三才の淫売婦の娘であり、三人の男から生まれた五人の子供の母親と面接したときの模様を次の様に書いている。すなわち、フェリシタは、子供に食べさせる金が全然なくなって本当に困ったとき彼女の母親は次のように云ったと述べている。

「私のお母さんはこう云いました。『さあお行き。あすこに行けばいくらでもお金ができる。私は長い間そういう生活をして来て、可なりお金もこしらえた。お前は仕度をして、子供たちを寝かせ、そして子供たちが寝つくまで待っていて、寝ついたら部屋に鍵をかけて出かせさすればいいのだ。さあ、今夜一晩かせぎまくればいいのさ』と。お母さんにこんなことを云われて私は不安でならなくなりました。」<sup>(6)</sup>

フェリシタは結局淫売婦になった。彼女の生活は幸福であろうか。彼女は吾々の住む社会には通用しない価値観に従って生活しているのだろうか。ここで再び本人の言葉を聞いてみよう。

「私が子供たちのために一番望むことは、子供たちが勉強して、自分の力で一人前になれるかどうかを見きわめることです。一人前と云ったところで、あの子たちを大学までやることなんかとてもできないのだから大したことはできないでしょう。だけど子供たちが少くとも高校は卒業していい就職口をみつけてほしいと思っています。そして女の子たちには処女ヴァージンのままで、きれいな花嫁衣裳を着て結婚してほしいと思っています。私は子供たちに、少くとも私よりましな上品な人になってほしいと思っています。人間はいつも希望をもって生きるべきです。……私は夫がいまいことを苦にしています。子供たちにミルクも買ってやれない時がありました。今は十分暮して行けませんが、私に何ができるでしょう。時折、私は子供たちを殺して私も身体に火をつけて自殺したくなくなることがあります。」<sup>(7)</sup>

サース教授は此処で、あまりにも生の資料の引用に時間をかけすぎたことの弁解として次のように云っている。「私は、貧困についての謬見をこの際、金輪際陽の目を見られないように地の底に埋めることは神の命令のように思われたのであえて長すぎる引用をした。貧困の中には幸福などあり得ないのである。にも拘らず、『ニグロを見ると彼らはいつも幸福そうだ。彼らが歌っているのを聞いたことがありますか。踊っているのを見たことがありますか。あのように歌ったり踊ったりする人は幸福なんです。』などととんでもないことを云うような現実をよく知らない人たち——吾々の中に現にいます——と対決しようではありませんか」と。

## (二) 「貧乏人は物がよく言えない」

之が第二の謬見である。之もよく耳にするところだが、貧乏人と話し合うことはむづかしいことである。たしかに彼らは言葉が少なく、同じ言葉でも彼らには違った意味を持つことがある。貧乏人は貧乏人でないと言葉が通じない、社会事業家、教師、そして心理学者は貧乏人と接触しようとする時、ことばの上の「鉄のカーテン」にぶつかるといふこともある。之は貧乏人が「物がよく云えない」からでもある。貧乏人は言葉づかいの技術がうまくないので、精神病院の医師たちは、貧民の精神分析は後まわしにして、専ら上流および中流階級の患者だけの分析に専念し、貧乏な患者にはトランクライザーとショック療法だけでお茶を濁すというのが相場である。

貧民を扱うのはむづかしいという専門家が多数のは否定できないところであるが、問題は専門家の側にあるのであって、貧民の側にあるので

はない。前述のハイライン・ルイスと彼の同僚はその調査研究の結果、「貧民も英語——必ずしも文法的に正しい英語ではないが——を、社会学者その他の専門家たちと余り変らないほど明瞭に話すことがわかった」と云っている。<sup>(8)</sup>

ニグロの貧民は大抵物が言えないどころではない。事実前述の育児実態調査の調査員たちは、——その中には白人ばかりでなく黒人もいるが——「貧民の言葉の方が彼らの仲間の使う特殊用語よりもわかり易いことがよくあった」といつている。貧民との対話の録音をもとにした書物が最近非常に多く出ているが、それを読むと、彼らが自分のことや身上話をしやべるときの雄弁さや無駄のなさ、また明瞭さはつきりわかる。然し人と話し合いをするためには、聞き手、すなわち建設的な対話に喜んでとけ込んで呉れる相手がいなければならぬのである。貧民の話し相手というのは大抵、彼らに指図をしたがる専門家か役人しかいないことを忘れてはなるまい。要するに「貧乏人は物がよく云えない」というのは一面的な見方にすぎないのである。

(三) 「貧乏人はすねており、無感動で近寄り難い」

第三の謬見はこれである。貧乏人がすねていて懐疑的であるのは、今日の資本主義社会における彼ら貧民の当然の反応であろう。スラムの住人たちが、自分の家の戸口にやって来る男に疑い深い表情を示さざるを得ないとしてもそれは当然のことではなからうか。なぜなら、そのやって来た男は大抵の場合お巡りか、探偵か、福祉事務所の訪問員か或いは集金人であり、又彼ら貧民は、社会の主流からはなれて孤立した生活をしているので、彼らの生活を利用するものでなければ彼らに指図をするのでもないような外部の人々とは減多に顔を合わせることがないからである。ワッツ地区 Watts District はロサンジェルス市の中心部にありながら、高速道路のバリケードによって全く外界と隔絶させられている。首都ワシントンの貧民街は、高速道路、駅構内、川、そして公共建造物によって外部から遮断され、話し合いの場も交際の場もとりあげられている。貧民は近寄り難く上へには敵意が感ぜられるが、吾々の経験に依ると、この固い殻の下には、自分たちの運命を切り拓こうとする決して消えることのない希望と願望とがかくされているのである。貧民は下層社会にとじこめられ虐待されているが、彼らとても社会の営みや自立計画の仲間引き入れられる可能性はもっている。

彼らの殻は時には硬すぎて、何度も何度も繰り返し辛抱つよく打ちくだこうとしてもくだけないこともあるが、いつかはくだける筈である。この事はワシントン貧民街居住者の転居後の追跡調査の結果(註)が証明して呉れる。

(註) 之はサース教授が、首都ワシントンの南西部地区(貧民が多く居住している)にかけて住んでいたことのある約百世帯の転居後の生活状態の追跡調査を行ったその結果である。本調査の主目的は、百世帯がワシントンより転出後五年目に居住しているところをつきとめ、その新しい転居先の近所の人々の中にうまくとけ込んでいかどうか調査することであった。対象世帯の大部分はどん底の生活をしていたが、彼らのうち七十五パーセント以上は「此の頃では誰を当てにしてよいかわからない」と云っており、又「将来の見透しもないのに子供を生むのはまちがっているのではないか」と考えているものが半数以上いた。而も、「近所に住んでいる人々がまとまって、この地域の改良のために何かすることが本当に出来ると思っていますか」という質問に対しては、回答者の約七十五パーセントが「できる」と答えていたのである。

Daniel Thursz, "Where Are They Now? (Washington D. C.: Health and Welfare Council of the National Capital Area, 1966)

貧民が近寄り難く、固い殻をかぶっていること、そしてその殻は時に硬く仲々やぶれないことについては既に述べた通りであるが、それは決して絶対にやぶれないものではないことと、そしてまた、人間は希望をもって来ると近寄り易くなるということとを、「アメリカ奉仕隊」VISTAの実践を通して実証してみよう。

貧困戦争の有力な戦力の一つである「アメリカ奉仕隊」は現在(一九六七年七月)、七千三百五十一人の隊員を擁し、四十八の州、首都ワシントン、プエルトリコおよびヴァージン・アイランド等全国四百十二ヶ所で、都市農村地域活動、職業部隊(Job Corps)季節労働者援助そして保健サービス等々の戦場で活動している。奉仕隊員は貧民の間に入り込んで仕事をし、また彼らと生活を共にしている。隊員(ヴォランティア)は特殊技能を持っていないものが大部分であるが、献身的であり熱意にあふれている。隊員の任務は、或いは子供の教育であったり、或いは字の読めない母親に、子供の勉強が見てやれるように読み書きを教えることであつたり、或いはまた保育所作りの手助けをしたりするというような具体的な援助をすることである。之等のヴォランティア(奉仕隊員)はマネージャーではなくむしろ隣人としてそうした任務を果している。彼らは失敗を知らないで、又彼らはいつ迄も地域社会の外来者ではなく、その中にとけ込んで行くので、戦果は大いに上つていくようである。

奉仕隊の基本的なアプローチ（戦術）は、奉仕隊員が貧民の代弁者になるのではなくて、貧民が主体的自主的に行動したり話したりするのを援助する“enabler”になるといふ社会開発のアプローチである。

人間というものは希望をもって来ると近寄り易くなるものである。彼らは自分たち同志で、又外からやって来た者でも彼らの生活の中に積極的にとけ込もうとしている人々であれば外部の人とも、お互に意志が通じ合うようになる并希望を持って来るものである。アメリカ奉仕隊の戦果は、貧乏人は近寄り難いという迷信を打破してくれるのではなからうか。

（四）「貧乏人は代弁者を必要としている」

之が第四の謬見である。今日貧民の代弁者の数は多い。人種が同じであるという文で当然に貧民の代弁者だとされる場合さえある。地或社会の中には、社会福祉施設や地域活動が地元の人々を貧民の代弁者になってもらえるかもしれないという期待の下に職員に採用しているところもある。実際のところ貧民は、外部団体によって任命される公式の代弁者、或いは、更に之はひどいが自選の代弁者など全く必要とはしていない。彼らは自分たちで組織を作り物を云う機会を必要としているのである。ただこういう機会は仲々得られないだけである。機械というものは組立てられたら十分に注油しなければならぬものである。人間は先づ機械を信頼し、それからそれを自由に操作して行くべきである。いわゆる「貧民投票」(“poor elections”)という新しい試みが多くの地域社会で支持された。之は、自分は貧乏だと思っている人々に、種々の地域活動団体の代議員選挙に投票させようというのである。フィラデルフィア、クリーヴランド、そしてロサンジェルスは此の「貧民投票」を実施したが結果は芳しくなかった。<sup>(10)</sup>この投票に喜んで参加するものは殆んどなく、又地域社会によっては貧乏だと見られるのを好まない人や、部落役員の選挙なら大いに参加したかもしれないという人が多かったところがあつたのである。

投票後直ちに善後策が講じられたが混乱は避けられなかった。この「貧民投票」というアイデアは性急であるかもしれないが結局あきらめられてしまった。公民権を奪われている人々が、そのような制度を高く評価し実行に移す迄には、たとえ十分検討して打出した制度であつても、並々ならぬ努力を必要とするであろう。民主的なプロセスは人間の本能ではない。それは学習されるべきものであつて、それを教えようとするものは、忍耐とそのプロセスそのものに対する信念をもっていなければならない。

（五）その他の謬見



今日挑戦を受けている貧困についての謬見は上記の他にも数多くある。「貧乏人は同質の大衆で、同じ様な態度を示した同じ様な目標を持ち、独特のそしてかたくなな価値体系をもっているものだ」という見方は、「貧乏人は自分たちの運命に対しては完全に合理的に反応するものだ」という見方に変りつつある。若し彼らの反応に何か似たようなところがあるなら、それは環境が同じ様な場合が多いからである。貧困には非常な差違があるのであって、吾々は貧困概念を拡大しなければならない。すなわち、経済的貧困があるか、と思えば希望がないという貧困や、知識の貧困やそして人間関係の貧困もある。吾々の戦争の目指す敵は之等すべての貧困である。吾々は此の貧乏追放戦争の戦いの中で、敵を降伏させることの容易でないことを学びつつあるのである。

- (1) Health and Welfare Council of the National Capital Area, *Poverty's Children* (Washington D. C.: Cross-Tell 1966)
- (2) *Ibid.*
- (3) *Ibid.*
- (4) *Ibid.*, p. 6.
- (5) Oscar Lewis, *La Vida* (New York: Random House, 1965) p. 299.
- (6) *Ibid.*, p. 351.
- (7) *Ibid.*, p. 371.
- (8) Health and Welfare Council of the National Capital Area.
- (9) *Ibid.*
- (10) Arthur B. Shostak, "Permitting Participation of the Poor: Philadelphia's Antipoverty Program", *Social Work* (January 1966) p. 64-72.

## 五、貧困追放の論理

貧困戦争に最初に召集された新兵の中には、貧乏追放戦争に必ず勝つと信じ切っていた全く新しいグループがいたが、彼らは皆一人一人、自分の問題意識と解決策のみが貧困を根絶し得ると確信していた。彼らは議論になると自分の解決策の効果を誇張し他の方策には一切耳をかさないのである。彼らの理論は夫々現実のニードに基づいており、それ丈に或る意味で価値をもっているので、その扱いは仲々厄介である。貧乏は追放できると信じ切っている人達はどんな人達なのだろうか。彼らは五つのタイプに分けることができる。

第一のそして最も有力なものは、「貧乏人は権力を必要としている」と信じ込んでいるタイプの人たちである。彼らは現体制が、戦闘的な貧民の新体制に屈服し譲歩を余儀なくされるような権力の転移がなければ貧困は根絶されないと信じている。彼らは暴動が起こらなければこの様な譲歩はあり得ないと信じており、産業界、市議会或は既成の社会福祉制度の上で現に権力の座にあるものが、平和のうちにどうして何か少し

でも譲歩をするだろうかと公言している。貧民はまづ組織をつくり敵は誰かをはっきりさせなければならぬという主張の生れる所以である。

之とは正反対の考え方として、第二のタイプのものは「貧民は教育のみを必要としている」と信じている。彼らは包括的な長期教育計画こそ信頼のおける解決策であると云う。無知な人々に、彼らのほとんど知らないことについて意思決定をさせるなどナンセンスである。貧困に打勝つためには、貧民が合法的で有意義な職場を求めて他の人々と自由平等に競争できるようにしなければならない。貧しい親たちはもう手遅れかもしれないが、子供たちはまだ遅くはないというのが彼らの主張である。

第三のものは、貧困を専ら経済的次元においてのみ眺め、「貧乏人は金を必要としている」という。彼らによると貧困は結局金がないために生まれるということになる。すなわち彼らは、貧民に、思着せがましくでなく、また卑屈にさせるようなことのない形で金を与えれば、他の問題は凡て簡単に片付くだろうと考えている。彼らは合衆国の凡ての国民に対する「保障所得政策」(“guaranteed income”)を提案しており、同政策が実行されるようになれば、貧民も如何に責任ある態度をとることができるかがわかるだろうと云っている。就職問題については彼らは、之は陣腐な時代おくれの問題であるとし、オートメーションが労働力にどんどん食い込んでいるのだから、就業の価値についての古い考え方をやめて、就業中心の社会からレジュー中心の社会に目を向けるべきだと云う。そして就職口の数が年々どんどん減っていくという時代に、就職によってのみ収入を得るべきだというのは馬鹿気ているとさえ云うのである。

第四のものは「貧乏人は専門的サービスだけが必要としている」と云う。彼らは専門家の援助が得られさえすれば人間は自力で貧困の淵から抜け出す気持になれるものだと考えている。彼らの論法によると貧困対策即人間関係治療ということになる。貧困問題の経済的的要因に重点が置かれて来た一九六七年の時点で考えると、右の論法はやや馬鹿気ているように思われるが、一九六二年の社会保障法改正には此の考え方が大いに与って力があつたことを想起すべきである。「公的扶助のケースロードを、ワーカー一人当り六〇ケースにして呉れさえすれば、ケース・ワークは如何に立派な効果をあげることができるかを見せてあげましょう。過去においてケース・ワークが十分な成果をあげていないのは、ケースロードが過重であつた(或いは専門的なワーカーとスーパーバイザーを十分に採用する福祉事務所が殆んどなかった)からです」

最後のタイプは、貧困問題を単なるチャンスの欠如と見る人々である。彼らは「貧乏人はチャンスと就職口を必要としている」と云うのであ

る。貧乏人も生活を向上させる可能性はもっているのだが、現在のところ立身出世の道をふさがれて挫折感に打ちのめされているのだ。従って立身出世の道を開いてやれば問題は解決する。すなわち、貧乏人に職場を与えてやれば彼らはそこで一生懸命働き、そしてまともな社会に復帰するようになるだろうと云うのが最後のグループの主張である。

(1) 保障所得政策 Guaranteed income schemes.

貧困戦争の戦術或は武器として最近経済学者たちにより提唱されているものである。その敵密な意味での学問的紹介ならびに批判を行う余裕はないが、以下にその概略を左記資料にもとづいて紹介する。

George F. Rohnich "Guaranteed Minimum Income Proposals and the Unfinished Business of Social Security" Social Service Review July 1967, p. 166~170.

現在保障所得政策としては次の三つの方策があげられる。

その第一は、フリードマン (Professor Milton Friedman) が一九六二年より提唱しはじめた Negative Income Tax (負の所得税) という考え方である。之は無収入の人には年額三千ドルを負の所得税として無条件で支給する。一定額以上の収入があれば三千ドルより収入額を控除した金額を支給するというものである。フリードマンは、之は政治的に悪用されるおそれがあるが、現行の社会保障制度——公的扶助——に代り得るもので、公的社会保障は不要になるだろうと云っている (Milton Friedman "Capitalism and Freedom" [Chicago: Univ. of Chicago Press 1962] p. 192)

第二はテオバルトの提唱するもので、その内容は次のようなものである。すなわち、アメリカ経済の繁栄、技術革新に伴って、学歴も低く、技術水準も低い労働者は大量に失業する。彼らの購買力を維持するために、全国民に最低所得保障 (Basic Economic Security) を無条件で与えることにより、就職によってのみ収入を得るといふ昔からの行き方を根本的に変えようとするものである。右の保障額は成人年額千ドル、児童六百ドル (物価の上昇に応じて修正する) とし、他に少々の収入 (一割) はあっても問題にしない。之は現行の、過去の収入に基づきつぎは

ぎの社会保障制度にとつて代るものだと云う。 (Robert Theobald, Free Men and Free Markets, New York: Clarkson N Potter, 1963 p. 147)

第三のものはシュヴァルツ (E. E. Schwarz) の唱えるもので、第一と第二を組合せたようなものであるが、ミーンズ・テストの廃止をねらうところは他と違う。家族数に応じて貧乏線以上の生活を保障する金額の一種の家族手当 ("Family Security Benefits") を全国民に支給しようというものである。一九六四年七月当時、非農家の四人家族の手当を年額三千ドルとしている。就労奨励の意味で収入のある者については、収入をいくつかの段階に分けて右手当を差引く、例えば千ドル未満の収入のあるものは六割減、二千ドル未満は六割五分減……四千ドル未満は七割五分減、四千ドルより四千五百ドル未満の場合には手当は支給しない。そして四千五百ドル以上のものには累進的に所得税を課する。(累進率は従来のものより高い)

右三者はそれぞれ異なっているが、いづれも収入を問題にしない点は共通である。

フリードマンは、無条件で保障される金額は最低生活費以下であり、また若干の勤労収入があっても控除しないので、国民の勤労意欲をそぐようなことはないといふ、テオバルトは、「技術的失業者」には収入のある筈はなく、就労以外の収入を考えざるを得ないと唱え、また最後のシュバルツは、労働しない人が多くなるというのは思ひすぎとして

いる。こうした保障所得政策は貧困戦争の武器として果して威力を発揮しうるかどうかの判定を下すには、まづ、貧困または要保護性を追放しうるかどうか、そしてまた望ましくない副作用があつて結局非常に金がかか

りはしないかどうかを検討する必要がある。

答えはいづれも芳しくない。貧困を追放できるという見透しはないようである。

フリードマンの提案は現行制度よりはるかに金がかかるようであり、テオバルトの前提である「技術的失業問題」もやや被害妄想的であり、またシュバルツのミーンズ・テストの廃止も結局は実現不可能のようである。

## 六、結 び

### ——貧困の社会的側面と専門社会事業の任務——

上記五つのタイプの貧乏追放の論理はそれぞれ正しいところもあるが間違っているところもある。貧困は複雑であり、ただ一つの方法や論理で絶滅できるようなものではない。就職の機会も大切である。権力や教育も大切である。ケースロードを減らすことや必要なところに必要な施設を作ることにも役に立つ。たしかに貧困は現金収入の不足がある限りなくなるならない。

吾々は之までに貧民について多くのことを学んで来たし、彼らが貧困から抜け出すのを援助するためにはどんな形の手助けが必要であるかについて学んで来た。貧民の中には無知——殊に性と出産について、消費者知識について、政治についてそして保健衛生について無知なものが多いこと、そしてまた彼らがいともたやすくだまされることも吾々は知っている。吾々は彼らがだまされないよう長年にわたって可なり努力はして来た。而も恐るべきことに、法秩序をほとんど無視する少数の煽動家や有力な大衆運動の指導者は何をやらかすかわからないのである。貧民はたやすく暴力、掠奪そして流血の惨事に巻き込まれるのである。こうした事件は、特に貧しい者と富める者との間の溝が深まりつつあるような、そして失業、従って現金収入の不足が既に臨界点クリティカルポイントに達しているような社会においてよく起ることである。(ロサンジェルスロサンゼルスのワッツ地区では十八才から二十四才までの青年の四分の一が失業している)

貧困の社会的側面に関連して最後に指摘したい点は、現代社会における男性の重要性についての再認識ということである。即ち、男子の貧乏人が自尊心と自立心を確立しない限り、女性優位の世帯(女世帯)はなくなならないし又こうした現象に附随して必ずくりかえされる諸問題がい

ある。  
要するに之等保障所得政策は更にキメ細かく洗い上げて現実の問題にできるだけびったりあてはまるようにし、無駄を最少限度に切りつめ、そしてまた個々の基本的ニード(common needs)に適するように仕組まれている他の諸制度との調整をはかるべきであらう。

つ迄も後を断たないだろう。結婚について云うならば、男性に自活能力があり、又できれば子供たちを扶養する力もある場合でなければ、その結婚には見込がない。女性と子供は、男がいてもいなくてもその生活は保護されるのだ。夫のいない世帯——母子世帯への公的扶助を優先的に実施していく限り、私生児は後を断たないだろう。

約百年余り前にあるフランス人が当時のきたない世情に憤慨した。すなわちヴィクトル・ユーゴーは一八六二年に、有名な「レミゼラブル」(Les Misérables)という彼の作品の序文の中で次の様に云っている。

「法律と風習とによって、ある永劫とこしの社会的処罰が存在し、かくして人為的に地獄を文明のさなかにこしらえ、聖なる運命を世間的因果によって紛糾せしむる間は、すなわち、貧困による男の失墜、飢餓による女の墮落、暗黒による子供の萎縮、それら時代の三つの問題が解決せられない間は、すなわち、ある方面において、社会的窒息が可能である間は、すなわち言葉を換えて云えば、そしてなおいっそう広い見地よりすれば、地上に無知と悲惨とがある間は、本書のごとき性質の書物も、おそらく無益ではないであらう。」(岩波文庫、豊島与志雄訳「レミゼラブル」(一) 十五頁)

最後にサース教授は「私は敢えて云う」と前置きして次の様な可なり激しい言葉でその論文を締めくくっている。

「ヴィクトルユーゴーが憤慨したのと同じ状態が今日現に存在している。たとえ市民権闘争では如何に成功しているとしても、合衆国において貧困状態に停滞する自由などは決して真の自由ではないということを吾々は認識しなければならぬ。ハーレムに住む一青年は更に鋭く次のように言っている。『貧困の中に捲き込まれるということは一体何を意味するのであろうか』と。世界の他の国々においても吾々は非常に大規模な貧困問題に直面している。平和は貧困がなくならぬ限り実現しないであろう。之はわかり切ったことである。

今こそ吾々は、全世界を挙げて貧乏追放戦争を起す決意をしようではないか。そして、社会事業はこの戦争に、その全精力と、その最も創造的な精神とそして最もすぐれた熟練のわざを投入しようではないか。之こそまさに、社会事業が専門職業としての真の責務を果し得る唯一の道であると私は信じて疑わない。」